

APIR Trend Watch No. 32

～MICE 的観点から見るユニーク・ベニューとは？～

公財) 大阪観光局 MICE 推進部 担当部長

浅岡 さおり

はじめに

「MICE (マイルス)」が Meeting (企業のミーティング等)、Incentive (企業が研修や表彰の目的で行う旅行のこと。報奨旅行とも言う)、Convention (国際団体、学会などが主催する総会や学術会議等)、Exhibition or Event (文化・スポーツ・芸術イベント、展示会・見本市)、この4つの単語の頭文字をとったものであることはかなり知られてきたが、かつてはどのコンベンション・ビューローも「C」いわゆる学会、会議の誘致を推進することが主たる業務であった。現在はその範囲が MICE の4カテゴリーに広がり、今や世界各国間競争のみならず、少ないパイを奪いあいながら、日本国内でも各自治体が誘致に鎬を削る、静かに熱い分野となっている。

さて、タイトルにある「ベニュー」とは英語で「会場・施設」という意味だが、MICE 業界では会議・イベント開催会場のことを「ベニュー」と呼ぶ。

今回のトレンドウォッチではその「ベニュー」がいかにか「ユニーク」か、また「普通のベニューにそんな使い方があるのか」という事例を紹介してみたい。

ユニーク・ベニュー (Unique Venue)

先述のとおり、観光・MICE 業界ではこのところユニーク・ベニューという言葉がよく使われる。以下観光庁のホームページから引用する。

ユニーク・ベニューとは歴史的建造物や公的空間等で、会議・レセプションを開催することで特別感や地域特性を演出できる会場

海外都市においては MICE が開催されるのに合わせた文化施設や公的空間等を利用したレセプション等の開催は、MICE 誘致の観点から一般的となっている。しかしながら、我が国ではユニーク・ベニューとしてのポテンシャルの高い施設は多く存在するものの、利用開放は進んでいない状況。これふまえ、文化施設や公的空間等のユニーク・ベニューとしての利用の活性化等を促すことを目的に、「ユニーク・ベニュー利用促進協議会」を立ち上げ、我が国のユニーク・ベニューの開発・利用促進を図っている。

観光・MICE 分野にはこれまで注力してこなかった国はようやく重い腰を上げ、協議会を立ち上げるなど MICE を推進する動きに転じた。これを受け、各自治体、観光協会、コンベンション・ビューローなどもユニーク・ベニュー開発に本腰を入れ始めた。

今までは会議はいわゆる会議場や公的施設、レセプションはホテルや宴会施設で行うのが当たり前であり、今でもそれが大半である。しかし、それでは激化する MICE 誘致競争の中で、自分達のテリトリーに誘致する魅力的なコンテンツに欠けてしまう。世界各国の様々なベニューでのユニークな演出・もてなしを受け、目が肥えた主催者（MICE を主催する学会や企業、オーガナイザー）を満足させるにはどうすればいいのだろうか？そこで MICE 用とはされていない施設に目を向け、それをユニーク・ベニューとして活用させてもらう方法が考えられる。目的外活用できるベニューの拡大が MICE 開催地選択の大きな要因となるのである。（競争に勝ち抜く最も重要なキーの一つが「価格」あることはもちろん言うまでもない。）

大阪のユニーク・ベニュー紹介 『山本能楽堂』

能楽堂、本来はもちろん能、狂言などを行う舞台である。大阪の谷町四丁目下車すぐにある山本能楽堂は、昭和 2 年に創設された大阪で最も古い能楽堂だ。大阪大空襲で一度舞台が焼失してしまうも昭和 25 年に再建され、以後改築、改装をかさね現在に至っている。現在は能の普及はもちろんのこと、上方芸能の発信地として様々なイベントを催すなど、歴史と新しさを融合したすばらしい施設となっている。

この能舞台を中心とした施設を客席まで含めて会議、レセプション会場として公に利用することになったのは 2014 年からのこと。能楽堂全体をリニューアルしたことを契機にクローズドのパーティーや学会のレセプションなどに使うという斬新な試みである。

能舞台上でのスピーチや講演では、綿製白足袋の着用が必須であり、厳かな気分に含まれる。プロジェクターからの資料は舞台横の壁に投影される。会議終了後は床が畳張り（改装を機に床暖房完備になった）の 1 階席はテーブルと椅子をセッティングしパーティー会場へと様変わりする。ケータリングは一般的なパーティーメニューから、能楽堂と馴染み深い大阪の老舗料理屋まで手配が可能。外国人参加者はその雰囲気で大変喜び、楽しみ、大興奮する。外国人でなくとも多くの人がある非日常感と特別感に酔いしれる。参加者はみな普段体験できないパーティーで大満足し会場を後にする。まさに、これがユニーク・ベニューのユニークたるところだと言えよう。「自分達だけが体験できる特別感」「ありきたりでないもてなし」それが口コミで拡がり、リピーターを増やすのである。

これはひとえに山本能楽堂の運営者である山本代表理事ほか事務局サイドの柔軟な発想、アイデアによるたまものであると言える。伝統文化をつかさどる施設として、本来目的外の利用に踏み切ることにはなかなか高いハードルであったことは想像に難くない。伝統を軽んじるのではなく、そのハードルを飛び越えるポジティブさが、新しい施設のあり方を提案し、可能性を生み出すものだと考える。

写真は 2015 年 2 月に大阪で行われた企業家イノベーション会議「HACK OSAKA 2015」のレセプションの様相である。



今宮戎神社福娘のお出迎え



能楽体験



パーティー風景



参加者も体験



記念撮影

ちなみにこの今宮戎神社の福娘は、大阪商人の神様「えべっさん」として有名な今宮戎神社の神の遣いとされている。毎年末にオーディションが開催され、数千人からの難関を勝ち抜いた 40 名と留学生 10 名、計 50 名の 18 歳から 23 歳までの若いお嬢さんたちである。今年で 63 代目とこのことで長らく大阪の名物となっている。

大阪観光局では国際的な会議や、大阪の国際親善を図る目的で開催されるイベントについてはこの福娘を「MICE 支援メニュー」の一つとして提供している。レセプションでの華添え、大阪でしか行われない独特な手締め「おおさか締め」の披露など、大阪ならではの出迎えに、日々、各方面からの出演要請が絶えず、大阪のユニークコンテンツとして認知度が高まっている。

大阪に今ある観光資源を単なる「観光地」「観光施設」としてだけでなく、ユニーク・ベニユーの切り口から再活用していくことで、大阪の魅力をさらに発信することができるだろう。また行政区域でいう大阪に拘ることなく、近隣府県と連携し、世界の中の日本、日本の中の「関西」全体を MICE 開催地としての価値を高めていくことが、関西経済の底上げ、文化醸成を促進し、一過性ではない大阪-関西の人気を持続させるものとなるに違いない。

このような MICE 的観点からのベニユー開発 = 観光資源の掘り起こしが、今後の大阪の浮上に必要な一つの課題であると言える。

＜APIR リサーチャー浅岡 さおり

contact@apir.or.jp, 06-6485-7690>

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・本レポートは、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当研究所の見解を示すものではありません。・本レポートは信頼できるとされる各種データに基づいて作成されていますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。また、記載された内容は、今後予告なしに変更されることがあります。 |
|--|